

論文

# コミュニティ言説と孤独死

## —「常盤平団地」物語の再考察—

呉 獨立\*

### 1 はじめに

「孤独死」現象は厳密な定義を持たないまま社会的な問題として扱われてきた現象であり、それゆえに現象認識上の開放性を特徴にするものである。したがって、「孤独死」現象に対する認識には、実に多様な観点が存在し、それに相応して様々な言説が絡み合っている。

「孤独死」現象に関する言説<sup>(1)</sup>は、1) 個人化言説、2) 福祉・制度に関わる言説、3) コミュニティ言説に分けられるが、これは孤独死に関する認識の二つの軸—つまり、「当事者」と「周辺」といった一つの軸と現象の「原因」と「結果」といったもう一つの軸—を反映するものである。「個人化言説」とは、「現象認識の中心を孤独（孤立）の原因に置きながら、「当事者」、すなわち個人の観点をとる言説」[呉 2017: 131]を意味するもので、問題の原因及び解決に関して個人の選択（または努力）を強調する言説だと言える。一方で、「福祉・制度に関わる言説」は「現象の核を孤独（孤立）の原因に置きながら「当事者」でなく「周辺」の観点到立つ」[呉 2017: 130]言説で、問題の原因及び結果を社会的なものとして把握し、国家・行政に関わる制

度的・政策的問題に結びつかせるものである。本稿で注目しようとする「コミュニティ言説」は、先の二つの言説とは異なって、「孤独の結果（死）を中心に現象を把握する言説」で、コミュニティ（人間関係）を中心にする現象認識及び対処を特徴にするものである [呉 2017: 132]。

「孤独死」に関するコミュニティ言説は、阪神・淡路大震災以降現れた仮設住宅などでの「孤独死」現象、及び2000年代に団地を中心にした「孤独死」現象などを通じて、「孤独死言説」において主流を占めることになった。そして、そのようなコミュニティ言説はその後強化の一途を辿っている。

本稿では、1) 近代性との関係でコミュニティ言説を検討し、2) 「孤独死」に関するコミュニティ言説において決定的な役割を果たしたとも言える「常盤平団地」物語を読み直して、その中に潜んでいる属性を明らかにする。そしてそれに基づいてコミュニティ言説に対する批判的な考察を試みる。

### 2 「孤独死」とコミュニティ言説

「孤独死」に関するコミュニティ言説は、1970年代前半の記事などにおいてもその端緒を

\*早稲田大学大学院社会科学研究所 博士後期課程2年（指導教員 久塚純一）

垣間見ることができる。

……兵庫県・尼崎市の文化住宅で、一人暮らしの四十一歳の女性が、死んでいるのが見つかった。死後約八十日、遺体はミイラ状になっていたというのである。……他の部屋の人たちは「以前からめったに顔も見たことがなかったので、あの人が姿をみせなくても別に気にも止めなかった」という。……勤め先の人も、彼女の不在について、無関心だった……職場にいる人には、管理を行届かせるが、いったん職場を離れた人には、何の関心も持たないという、それは現代管理社会のひずみの一面を示すものなのだろうか。……

(朝日新聞1973年2月7日)

上の記事で見ると通り、1970年代前半、つまり「孤独死」が社会的な問題の一つとしてメディアを通じて言及された初期から、「孤独死」言説は現代社会において人間関係の問題、すなわちコミュニティの問題との関連を示しているのであった。しかし初期の「孤独死」言説は、「老人ブーム」のような福祉への当時の関心とかみ合って、福祉・制度に関連する言説と混じり合って現れる場合が少なくなかった<sup>(2)</sup>。

「孤独死」言説においてコミュニティ言説が全面に浮き彫りになったきっかけは、1995年の阪神・淡路大震災であった。地震の後、災害地に建設された仮設住宅（及び復興住宅）であらわれた数多くの「孤独死」現象は災害によって家族や職場を失い、地域コミュニティとの関係が切れた状況での死として頻繁に言われており、その中で「孤独死」問題はコミュニティの消失という言説を主軸としはじめた。この時期の「孤独死」関連コミュニティ言説における最も重要な要素は、仮設住宅という要素と密接に関わっていたことである。つまり、コミュニティ消失を圧縮的に見せていた仮設住宅団地での死

は、一方では一般大衆に同じ状況に置かれると自分自身も孤独死するかもしれないという警戒心を喚起したが、それにもかかわらず、まだその状況は日常的なものではない（災害による）特殊な状況であった。

この特殊な状況を普遍的な状況に引き下ろしたのは、2000年代に入ってから浮き彫りにされた「団地での孤独死」であった。すなわち、自分の居住している、または身の回りにありふれている「団地」で「孤独死」現象が日常的に発生しているという事実は、一般的な人々の持つ「孤独死」に対する心理的な距離を大いに縮小させたと言えよう<sup>(3)</sup>。そして「団地の孤独死」に関連する一連の言説において、その始発点であり、核心を占める位置に存在するものが、まさに千葉県松戸市に位置している常盤平団地であった。常盤平団地で行われた、自治会を中心にした活発な孤独死対応戦略は重要な成功モデルとみなされ、様々なメディアの注目を集めながら拡散された。実際に、朝日新聞で扱われている「団地の孤独死」関連記事のほとんどが常盤平団地の活動に関するものであり<sup>(4)</sup>、2005年NHKの「ひとり団地の一室で」とその他の放送や出版物など、常盤平団地は「団地の孤独死」に関する議論において欠かせない主人公であると同時に、特に地域コミュニティに重点が置かれている言説において一つの象徴的な物語になっていた。本稿が常盤平団地に注目する理由もその点に置かれている。コミュニティ言説の代表選手ようになった「常盤平団地の物語」は、2007年から実施された厚生労働省の孤独死対策に直接に影響を与えながらコミュニティ言説強化の役割を続くようになり、ひいては2010年NHKの「無縁社会：無縁死3万2千人の衝

撃」放送以降の代表的なコミュニティ言説である「無縁社会論」にもつながることになる。血縁、地縁、社縁の弱化を特徴にする「無縁社会」言説は一つの流行現象になって広がっていき<sup>(5)</sup>、関係の喪失及び社会的紐帯の不在から湧いてくる不安感への認識を主な流れとして展開していた。特に2011年に見舞われた大震災はそのような流れへの推進要因として積極的に作用することになった。2011年3月11日に起こった大地震と津波、原発事故といった未曾有の災難は、日本国民に金では買えない人びとの間の紐帯と結束力の大切さを再認識させるきっかけになったのである。「絆」は3・11大震災以降日本社会で頻繁にそして重要に、口の端に上る言葉になっており<sup>(6)</sup>、「絆」の復活への希望を語る言説は血縁や地縁、社縁とは異なる形で強い連帯感を持つ共同体に対する可能性につながり、無縁社会の問題点を解決するための核心的なキーワードに位置付けられるようになる<sup>(7)</sup>。

### 3 近代性とコミュニティ言説

このようにコミュニティ言説が人びとに強く訴えかけ、主導的な言説になった理由は何であるのか。この問いに関連しては、代表的なコミュニティ言説と言える「無縁社会論」の流行現象に対する石田（2011）の批判的分析を参考にすることができる。

2011年に出版された石田の著書、『孤立の社会学』は「無縁社会の処方箋」という副題のもとで「孤立」に関する一連の社会的な研究成果を含めている。そこで石田は「無縁社会」の背後に「社会的排除」（つまり、「機能」の問題）と「親密圏の変容」（つまり、「関係」の問題）という問題が潜んでいることを主張する。

石田の説明を借りて言うならば、「社会的排除」とは経済的な貧困が中心的位置を占めていた以前の「排除」とは異なって、多様な排除（多元性）、そしてそれらの間の一連の連鎖（継時性）を特徴にするものである。すなわち、「非正規などの不安定雇用による労働市場からの排除、劣悪な住環境による住宅及び地域からの排除、家族などの人間関係からの排除、健康問題などの医療からの排除」などはそれぞれが連鎖的につながる連続性を持つものである〔石田2011: 5-7〕。しかし、流行現象としての「無縁社会」と関わっている「社会的排除」の特徴として石田が強調するものは、「多元性」や「継時性」よりは「越境性」である。つまり、「「無縁社会」の流行は、排除が対岸の火事でなく、多くの人に降りかかる問題に様相を変えつつあること、それに対する人びとの認識が高まっていること」〔石田2011: 8〕を示しているものである。先に指摘したように、2000年代半ばに「団地の孤独死」がコミュニティ言説に結びつくことにおいても、この「越境性」は重要な役割を果たすものであった。つまり、仮設住宅（特殊な状況）から「団地」という空間（普遍的な状況）へ孤独死言説の主な空間が移っていくことによって、誰も「孤独死」と遭遇することができるという可能性およびそれに対する認識の高まりが著しくなったのである。

しかし、石田は「社会的排除」に関する議論が「無縁社会」流行現象についての説明において、部分的な説明しかできないことを指摘する。「社会的排除」の問題に対する議論はこれまで多くの論者によってなされてきたにもかかわらず、「無縁社会」ほどの反響はなかったからである。石田によると、この不足部分に関する説

明の核を握っているものは親密圏の変容、つまり「関係」の問題である。越境型の排除が「排除」という言葉ではなく、「無縁」という言葉で表現されることに端的にあらわれるように、排除の問題が人間関係問題の顔になって現れる瞬間、それは人々の心の琴線に触れると同時に不安を喚起する装置として働くことになったのである。

石田の注目している「親密圏の変容」とは、ギデンズ (A. Giddens) の「再帰的近代化論 (reflexive modernization)<sup>(8)</sup>」に基づいている概念である。かつての血縁、地縁、社縁のような人間関係が個人の意志とは無関係に外側に存在するものであったとすると、近代化および個人化の進展しつつある中で現れる人間関係は個人の自己選択性が拡大した結果生ずる「純粋な関係 (pure relationship)」である<sup>(9)</sup>。人間関係のこのような特性は人間関係に対する個人の自律的な統制が可能であるという感覚を与える。しかし、それとともにこのような人間関係のもつ高い流動性および崩壊可能性は個々人に負担と不安を抱かせることでもある。すなわち、ギデンズの言う純粋な関係は当事者間の関係に異常が生じた瞬間、その関係性そのものが根本的に脅かされることになる関係である [Giddens 1991; 1992]。そして「無縁社会論」は、近代的な人間関係の根元に置かれているこの一連の不安感およびそれに対する回避心理とかみ合っただけでなく、人々から激しい反応を導き出せるものであった。

近代性とは確実性の世界から不確実性の世界への移行を内包する。バーガー (P. L. Berger) によると、近代化は「宿命から選択へ」の移行を意味しており、「選択すること」は省

察すること」を意味することである [Berger 1979]。確実性の保護膜が消えて、自身を囲んでいたすべてのことから遠ざかってしまった個人はどこにおいても確実性を見つけることができない。したがって、近代的な個人は自分自身の内側に目を向けることになり、その結果「内的な壁 (inner barrier)」 [Simmel 1978: 477] を築き、その中で確実性を探すためにますます自分の内側に沈潜していくことになる。「主観化過程 (subjectivation)」と呼ばれるこの現象 [Gehlen 1980; Berger 1979] はナルシシズム的な現代文化 [Lasch 1980] の理由に対する説明にもなるものである<sup>(10)</sup>。しかし、確実性というものは社会から与えられるものであるため、自分の内面への探索は結局失敗という結果に陥ることになる。この状況は近代人をして、「異邦人<sup>(11)</sup>」の状態、または「故郷を喪失した状態」 [Berger et. al. 1973: 77] にあると感じさせることになる。このような人間は究極的かつ核心的な精神的要素を持っていないため、不安の状態、根のない状態 (rootlessness)、アノミー状態 [Berger et. al. 1973: 76] に置かれることになる。結局、私は誰であるのかに対する答えのない問いかけを続けながら生きていく近代人は深刻なアイデンティティの危機を経験する。

このような主観化過程が近代的な不確実性に対する近代的な反応だとすると、これとは異なる別の対応、すなわち反近代的 (counter-modernization)、または脱近代的 (de-modernization)<sup>(12)</sup> な対応も存在している。それらは、個人の主観ではなく外部の共同体的な連帯を通じて確実性を追求しようとする点において、コミュニティ言説に関連するものである。前近代的な意味での堅固な集団的紐帯感の回復

か（前近代的共同体への回帰）、または新たな形の共同体的な紐帯感の創出か（ポストモダニズム）による対応の相違は存在するものの、重要なことは不確実性と不安（つまり、近代）から脱して確実性と安定を追求しようとする（脱・反近代）はコインの両面のようなもので、それ自体がまさに近代性ということである。近代性および脱近代性に関連して意味深い洞察を見せているバーガーは次のように指摘する。

……人は近代性に反するものを選ぶことができる。そこで人は近代化のプロセスを操作しようとするであろう。しかしながら、これらの考え方「自体」が近代性－事実上の近代化－そのものなのである。社会発展へのさまざまな経路に関して人間が一つの選択権をもっているという考え方ほど近代的なものはない。

[Berger et. al. 1973: 177]

「近代 (modern)」という言葉が「まさにいま」、「今日」を意味するラテン語「modo」から由来することを指摘しながら脱近代の意味に関する主張を展開するカリネスク [M. Calinescu 1987] を参考にしてみると、次のように言えるであろう。すなわち、「近代」が時間軸の中で、ある特定の時点を指すものではなく進行しつつある瞬間を意味するならば、我々は常に「近代」に生きていることになり、近代以降近代を否定する動き（脱・反近代）もまた常に「近代」になる。この意味で脱近代（ポストモダニズム）は（時代的な区分ではなく）「問いかけ」の性質を示すものであり、「近代性の持つ複数の顔の中で現実に対して絶えず懐疑する (self-skeptical)」省察的な観点にすぎない [Calinescu 1987: 278-279]<sup>(13)</sup>。

近代性は初めから秩序と意味、連帯意識の回

復された世界への郷愁を持ってきており、言い換えれば近代と反・脱近代は常につながっている過程だと言える [Berger 1979]。すなわち、コミュニティ言説が今日の人々の目を引くのは、それ自体近代性という流れの必然的な結果だと言うべきであろう。このような近代化－反（脱）近代化といった矛盾するベクトルの共存という近代性の特性は、石田が指摘するように、「開放感<sup>(14)</sup>は享受したいが孤立は避けたい」という矛盾する心性を呼び起こす背景に置いているものである<sup>(14)</sup>。

近代性の必然的な帰結であるために、コミュニティ言説に用いられている「コミュニティ」、「連帯」、「関係」といった概念は近代性の枠の中で慎重に検討しなければならない。

古典的な社会学理論および近代性についての数多くの議論<sup>(15)</sup>は、近代以前のコミュニティは社会と区分できないものとして存在したものの、近代化の進展によって社会からコミュニティが分離する現象を指摘している。すなわち、近代という空間は、もうこれ以上「関係」と「機能」が一致した状態として経験できない世界を意味するようになったのである。過去の血縁、地縁、社縁といった関係は単に人間関係の機能にとどまるものではなく、個人をして社会に無事に足を踏み入れることができるように全方位的な支援をする担い手であった<sup>(16)</sup>。つまり、「関係」の中で「社会」は直接体験可能なものであり、従ってそれだけ個人と密着していた。しかし、近代性の展開はそれらの関係を、ギデンズの表現通り、ひたすら純粋な関係だけで機能するようにさせており、従って個人は気にしなくても自然に持つことができた社会との接点を失いやすい（排除されやすい）時代に生きること

になったのである。つまり、「無縁社会」は「縁」の喪失というよりは、「縁」の持っていた基本的な「機能」の喪失である。言い換えると、コミュニティ言説の基本的前提とみなされる「コミュニティの弱化・喪失（無縁社会）」という概念の本質的な意味は、「人間関係の喪失」ではなく、「関係と機能の断絶」にあると言えよう。

表1 近代と前近代におけるコミュニティの状況

前近代	近代
コミュニティ=社会 (関係=機能) 同質性 具体的/人格的關係	コミュニティ≠社会 (関係≠機能) 異質性 抽象的/非人格的關係

従って、今日コミュニティ言説の中心をなす「関係の回復」は「機能の回復」につながることの難しい内在的な構造を持っているのである。コミュニティの再生およびそれによる関係の回復それ自体は不可能なことでもないし、なおさら非難を受けることでもない。しかし、近代的な状況の下では、それはより緩くて、流動的で、抽象的な形の関係によるものでない限り、達成され難いものであろう。また、何よりも重要なことは、そのようなコミュニティの再生が、「機能」と「関係」が硬く結びついている状態への帰結を意味していないという近代的な状況を看過してはいけないという点である。過去の共同体への回帰（反近代）を主張することは、それ自体一つの近代的な現象として否定できないものの、それは叶えられないことへの追求で終わってしまう可能性が高いものであり、過去とは異なる新しい共同体を志向（脱近代）する主張は、実現可能性においてはより大きく見えるかもしれないが、例えそれが実現されたとしても、「機能」を排除した「関係」だけの再生

にとどまる、いわゆる近代性の壁にぶつかることは避けがたい。

#### 4 「常盤平団地」物語

前述の通り、「孤独死」に関するコミュニティ言説において一つの象徴的な物語とみなされる常盤平団地は、団地誕生以来半世紀を超える時間を経て（他の団地と同様に）初期とは全く違う姿に変貌してきた。常盤平団地の入居がはじまった1960年の『経済白書』に登場した「団地族<sup>(17)</sup>」という言葉が示しているように、常盤平団地は比較的收入が高くて若い家族が入居者のほとんどを占め<sup>(18)</sup>、周りからの羨望的になる住居地であった。しかし時間が経つにつれて高齢化と老朽化を経験することになった結果、2000年代に入った時点での常盤平団地は高齢者および単独世帯の増加<sup>(19)</sup>、そして生活弱者（つまり、社会的に排除されやすい者）の増加を特徴にする空間になっていた<sup>(20)</sup>。このような状況が「孤独死」現象の発生とある程度関連性を持っていることは事実であるが、「孤独死」と関連して常盤平団地が注目を集めたのは、何よりも常盤平団地が「孤独死」に関する情報や議論の場を提供する発信の中心地としての役割を積極的に果たしてきたからである。

##### 4-1 「発信の中心地」としての常盤平団地

常盤平団地が「孤独死」問題に力を尽くすことになった発端は2001年（死後3年経過後発見）と2002年（死後4ヶ月経過後発見）に団地内で発生した2件の「孤独死」現象であった。集合住宅で孤独死が発生した場合、敢えて公然と口にせずタブー視することが一般的な傾向であるものの、常盤平団地の取った姿勢はむしろ「孤

「独死」に対する正面对応であった。団地自治会長中沢卓美は次のように語っている。

「マンションや団地においては、評判や住居価値などを気にして、公にしたがらないのが普通ではないでしょうか。しかし私どもは、思い切って、団地住民へ「孤独死」の問題を投げかけてみることにしました。「団地内では、このような問題を抱えている」と団地住民みんなで事実を認識して、それらの課題を共有してもらおうと思ったのです。」[中沢 2008a: 14]

すなわち、常盤平団地自治会を中心に「孤独死」に関する情報をさらに広く共有し、活発な議論の場を構築して情報発信の泉としての役割を自ら要望したのである。

2002年生じた「孤独死」の3ヶ月後（2002年7月17日）に開催した「第一回「孤独死」を考えるシンポジウム」をはじめ、持続的に「孤独死」問題に関する発信の場が設けられることになり、自治会長である中沢を中心にした講演、インタビュー、書籍刊行などを通じて一般市民や各種メディアへの露出が積極的に行われた<sup>(21)</sup>。

また、このような情報発信の作用は行政側に向けても強く行われた。次の表2で見ると、シンポジウムなどに厚生労働省や県の官僚を参加させており、特に松戸市に孤独死実態調査に関する積極的な要請を行い（2002年）、2004年「孤独死」データの公表を導き出したことや<sup>(22)</sup>、2005年と2006年に2回にわたってなされた厚生労働省への陳情、2007年厚生労働省で行われた常盤平団地の孤独死対応に関する事例報告<sup>(23)</sup>などは県や国が「孤独死」問題に着目する契機を提供した側面が大きかったと言える。

表2 常盤平団地の孤独死関連主要シンポジウム

開催日	シンポジウム名
2002.7.17	第一回「孤独死」を考えるシンポジウム
2003.8.18	第二回「孤独死」を考えるシンポジウム
2004.6.5	第三回「孤独死」を考えるシンポジウム (厚生労働省副大臣(森英介(当時)) 基調演説, 北波孝補佐(当時)参加)
2005.12.17	地域福祉フォーラム「孤独死ゼロ作戦 を考える」 (千葉県知事(堂木暁子(当時))基調 演説, 野村誠司課長参加)
2007.8.2	サマーセミナー・タウンミーティング
2007.12.10	フォーラム2007-「『孤独死ゼロ作戦』 5年間の総括」

実際に常盤平団地の「孤独死」対策は2006年の「松戸市地域福祉計画」および「千葉県高齢者保健福祉計画（2006-2008年度）」の中で紹介されており [中沢 2008a: 27-28]、さらには2007年厚生労働省の「孤立死防止推進事業（孤立死ゼロ・プロジェクト）」につながって<sup>(24)</sup>、予防形コミュニティづくりに主力することを提案する厚生労働省の2008年の報告書にも反映されている [厚生労働省 2008]<sup>(25)</sup>。

このような情報発信の役割においても一つ注目すべきものは、2004年7月23日に全国最初に設置された「孤独死予防センター」である。明確に「孤独死」問題に焦点を絞って対策を提示する自治体が少ない実情の中で<sup>(26)</sup>、孤独死対策の拠点であると同時に関連情報収集の中核を担当するこの予防センターは、「孤独死」という現象を一つの独立した問題として把握する脈絡においてその意味が深いと言える。これもまた、孤独死に焦点を当てている2007年の厚生労働省の動きに常盤平団地の影響が大きかったとみなされる理由の一つとして評価されるものである。

以上のように常盤平団地は、「孤独死」言説が災害地ではなく「日常」という時・空間に位置付けられて、一般大衆だけでなく行政側までも包摂しながら全国的な規模に広がる波長の同心円の真ん中に存在していた。

#### 4-2 「常盤平団地」物語に潜んでいる特徴

「孤独死」現象に対する常盤平団地の対応は、団地自治会、地区社会福祉協議会、民生委員といった3つの軸を中心にする緊密な連携を中核に位置づけながら展開されたものであった<sup>(27)</sup>。具体的な活動としては、先に言及した情報発信以外に、「孤独死110番」という緊急通報システム、安心登録カードなどを中心にする見守り体勢構築と「あいさつ運動」、「いきいきサロン」など地域コミュニティの再生・強化をはかる取り組みなどがあげられる<sup>(28)</sup>。もちろん、見守りやコミュニティ強化に関連する活動など、常盤平団地で行われた孤独死への対応方式は、実は以前から常盤平団地以外にも持続的に試みられてきたもので、常盤平団地だけの独特な対応とは言い難い<sup>(29)</sup>。従って、常盤平団地の対応が一つの成功例として語られている現象を見ることにおいて重要なことは、各々の対応プログラムよりは、それを実現するための主導的な主体及び客体に対する理解だと考えられる。

##### 4-2-1 人的要素への強い依存

常盤平団地の孤独死への対応において、主軸をなしている団地自治会、地区社会福祉協議会、民生委員の中で最も中心をなす軸は団地自治会である。実際に、常盤平団地自治会は2009年総務大臣表彰を受賞したが、受賞理由は次のようなものであった。具体的には、①「孤独死ゼロ

作戦」の全国的普及、②地域コミュニティ再生への「いきいきサロン」の貢献、③48年間続いた自治会報「ときわだいら」のコミュニティ再生・地域づくりにおける貢献であった〔清水2017:25〕。

この常盤平団地の自治会活動を論じる際に欠かせない要素が、まさに中沢卓美という人物である<sup>(30)</sup>。自治会活動において大きな比重を占めており、強力な影響力を発揮してきた中沢会長がいなかったとしたら、「孤独死ゼロ作戦」も、それ以外の活動も成功することができなかったという意見には、関係者のほとんどが異論を持たないであろう。しかし、ここで指摘しようとするのは、「その会長がいなかったら本当に成功はできなかったはず」という点である。すなわち、常盤平団地の成功には、とある非人格的で抽象的なシステムではなく、極めて人格的で恣意的な要素がその中核を握っていたのである。

常盤平団地の自治会は、入居開始の2年後の1962年に結成され、2017年現在まで存続している。中沢は自治会の初期メンバーとして活動を開始し、1978年に自治会長に就任して以降、2017年現在に至るまで自治会長歴だけで30年以上になっている、文字通りに常盤平団地自治会の生き証人であり、象徴的な人物だと言っても過言ではない。総務大臣表彰の理由にも言及されている自治会報「ときわだいら」は、自治会活動の大きな役割を担当してきたもので、1962年6月に刊行（月1回）をスタートして以降、現在まで絶えずに続いているが、それもまた、中沢の、中沢によるものだとも言える。中沢は1984年54歳で退職するまで産経新聞社で勤務しており、産経新聞社退職後には、船橋市のタウ

ン誌「月刊myふなばし」の編集長として務めることになる。自治会報の持続的な刊行ができたのも、その背景には中沢会長の職力の存在が不可欠だったと言える。実際に自治会報「ときわだいら」のほとんどの紙面は中沢本人の記事で埋められる場合が多く<sup>(31)</sup>、これは今になっても変わりはない。

また、4-1節で言及した、(大学などを含めた)全国にわたってなされた、「孤独死」への対応に関する講演活動、各種メディアとのインタビュー、著述活動、陳情活動、事例報告など、その全ての活動も中沢によって行われていた。しかし、これらは確かに「自治会長」という肩書きに求められること以上のものである。中沢個人に対する依存はここでとどまらず、「孤独死110番」という緊急通報システムで端的に見られるように、相当な私的プライバシーの犠牲にもつながっている。「孤独死110番」の連絡網において、一次的な連絡番号として指定されているのは、自治会事務室やUR(都市再生機構)、警察署などではなく、自治会長の個人連絡先で、中沢の勤務先である「月刊myふなばし」の編集室電話番号及び夜間のための個人自宅番号までもそのまま使われていた。

人的要素に対する強い意志と個人的な犠牲を伴う仕組みは、自治会と地区社会福祉協議会、民生委員の一体化という方式の中でもよく示されている。課題の共有や共通の理解が重要だという判断のもとで、中沢が全面に出した方式は各行動主体が複数の役割を兼務することであった。自治会長は地区社会福祉協議会の事務局長を、自治会の他の役員たちも地区社会福祉協議会の理事を兼務しており、地区社会福祉協議会長は団地民生員会長及び自治会の副会長を、孤

独死予防センターの所長は民生委員及び団地自治会の役員を、民生委員・児童委員も自治会役員を兼務することが求められた。活動の結果に対する評価とは別に、実際に同一人物が複数の組織の中で活動するこの状況を厳密に言って連携と呼べるかについては疑問が残る。また、果たしてこのような方式で持続的な運営が可能であるのかに対する恐れも否定できない。常盤平団地での自治会活動は単なる自治会活動にとどまらず、様々な役割を同時に果たさなければならないという負担を伴うものになっている。もちろん、その役割を喜んで受け入れる人的資源が存在する限りは成功しつつあるかもしれないが、高齢化及び個人化の深まる現実の中では明るい未来を予測することは難しいというのが事実である。2017年現在でも、自治会長を担っている中沢は相変わらず自治会報の多くの紙面を執筆しながら、様々な活動を続けており、同様に長い間地区社会福祉協議会長を務めている大嶋愛子も団地自治会の副会長として自治会の福祉部だけでなく、生活部まで担当して活躍している。もちろん、彼/彼女らの卓越な能力や熱意は評価すべきことであるものの、すでに高齢に達している彼/彼女らが相変わらず最前線で活動していることは、彼/彼女らに代わって活動する資源が不在であることを反映するものとも言えるであろう。

#### 4-2-2 共通の集団経験による強い住民意識

熱情的で高い執行力を兼備した人物の存在は、確かに「孤独死」に関する対応活動においては、大きなメリットであることは事実である。しかし、単にそのような人的要素が存在することだけで、常盤平団地の成功物語は説明できな

いであろう。すなわち、地域住民全体の高まった集合意識の存在がなければ、ただ特定の個人的なカリスマなどによって活動の成功が保障されるとは言い切れないのである。その側面においても常盤平団地は自らの特別な物語を持っていた。

他の多くの旧公団住宅の場合、「賃貸」と「分譲」が混在していたことに比べて、常盤平団地は全世帯が賃貸住宅であった点においても、初期の入居者たちの階層的な類似性ととも、ある種の同質性が備わっていたと見ることもできる。

表3 「家賃裁判」以前の常盤平団地と公団間主要争い

時期	内 容
1965	「空室家賃値上げ」反対
1967-1968	水道料金値上げ反対 →一戸あたり30円還元成功
1969-1970	公団の家賃値上げ反対署名運動 →値上げ阻止成功
1973-1975	公団の共益費値上げ反対 →値上げ幅縮小成功 公団の家賃値上げ反対署名運動 →値上げ阻止成功
1976-1977	公団の家賃値上げビラに対抗 →「ビラ返上運動」 →値上げ分不払い運動（90%参加） →値上げ幅縮小、敷金徴収中止
1982-1983	水道料金値上げに対する公開質問 生活困窮者への「特別装置拡大」要求

しかし、高齢化及び老朽化の進行しつつある中でも、常盤平団地の住民に強い集合意識が存在したのは、その背景に住民同士間に共有された特殊な経験があったからである。それは、家賃値上げに対する団地の戦いと建て替え反対運動で代表されるものであった。

「家賃裁判」、「福祉裁判」と知られている常盤平団地の家賃値上げ反対闘争以前にも、公団及び松戸市に対抗する自治会の活動はかなりの来歴を持っていたが（表3参照）、1988年から本格的に展開した訴訟闘争は「裁判」という形と通して住民の結束及び組織化を強化した点で意味深いものであった。

表4 「家賃裁判」と「福祉裁判」の主要経過

家賃裁判	
1988.12.5	訴状提出（家賃債務不存在確認請求）
1989.2.23	第一回口頭弁論（千葉地裁松戸支部）
1991.10.23	原告・被告和解勧告
1991.11.20~1992.4.30	総5回交渉：決裂
1992.9.4	判決：自治会の敗訴（控訴しない）
福祉裁判	
1993.1.29	訴状提出
1993.4.23	第一回口頭弁論（千葉地裁松戸支部）
1996.4.26	一審敗訴：控訴
1996.9.19	控訴審（東京高裁）
1997.8.7	二審判決：控訴棄却

家賃裁判は中沢が10年ぶりに再び自治会長に就任した1988年12月、中沢外4人が家賃値上げの不当さを訴えながら公団を相手に訴訟を提起することではじまった。これは住民訴訟の形態で展開した全国最初の家賃値上げ反対運動で[結城 2008: 45]、1989年2月の第一回口頭弁論以降ほぼ4年にわたる戦いが続いた。この戦いは、1992年9月の判決によって自治会の敗訴という結果となった。しかし、常盤平団地自治会は、老齢・低所得者などの実態を無視して行われた1991年の公団の家賃値上げに対して「団地生活権」を主張し、再び訴訟を提起（中沢外6人）した。いわゆる「福祉裁判」という名のもとで行われたこの訴訟が1997年2審判決によって再度自治会側の敗訴で終わるまで、長期間に

わたる住民訴訟運動は続いた。家賃裁判と福祉裁判は結果的には自治会の敗訴で終わったものの、訴訟の過程で常盤平団地の名前は全国的に知られるようになり、自治会による団地住民との積極的な情報共有などを通じて団地コミュニティが強化されたことも評価されている。

1997年から2000年までの常盤平団地の建て替え反対運動は、先の訴訟とは異なり、最終的に団地自治会の全面的な勝利で終わったものであった。松戸市の1996年「松戸総合計画」と1997年「松戸住宅マスタープラン」に含まれていた団地再建築の計画に反対して起こったこの運動は「空き家問題<sup>(32)</sup>」とかみ合って、署名運動、公開質問、他団地と連携したデモ活動<sup>(33)</sup>などを通じて活発に展開され、2000年3月13日に自治会と公団側の間に覚書の調印が行われることで一段落がついた。その結果、空き家に対する入居者の新規募集を再開するようになり、建て替えについては全面的に再検討されることが決定された。特に、建て替えによってかつての人間関係が希薄化した事例が珍しくないことを考えると<sup>(34)</sup>、建て替えの阻止は常盤平団地の強い結束力を維持することにおいても意味深いものである。

このような集団的な経験を通じて育てられた住民間の緊密な集合意識とネットワークは、常盤平団地の孤独死ゼロ作戦につながり、その核的な土台をなすようになったのである。常盤平団地の孤独死への対応戦略が成功例的なものとして評価される要因には、自治会長を中心にした、同質的で人格的な関係のもとで結びついた強力な行為主体、そしてそれに呼応する強い連帯感を有する集団が根底に存在していたと言わなければならない。

しかし、常盤平団地の物語から読み取れるこのような特徴は、近代という時・空間で現れるコミュニティの普遍的な特徴とはほど遠いものである。中沢のような人はどの自治会にも期待できる人物ではないし、常盤平団地のような集団的な経験を保有するコミュニティも決して一般的とは言えない。「コミュニティ再生」に関連する成功物語を求めているコミュニティ言説にとって、常盤平団地の物語は良い餌食に見えるかもしれない。しかし、常盤平団地物語の本当の姿を見ると、それがコミュニティ再生においては非常に特殊な事例であり、そこでの特殊な成功はむしろ一般的な失敗を浮き彫りにすることが読み取れる。

## 5 コミュニティ言説の批判的考察

つまり、常盤平団地の物語は、皮肉なことに、コミュニティ言説の脆弱性を露呈させていると言える。常盤平団地の物語は自分の私的なプライベートまでも好んで犠牲しながら行為する強力な人的要素及び強い連帯をもつ集団を前提にしないと、コミュニティ再生のための実践的な活動の成功が保障できないことを示唆する。言い換えると、「コミュニティのためには、コミュニティが必要である」という皮肉な状況を語っているわけである。

これは、コミュニティ言説が常盤平団地のような特殊な物語と結合する場合によく露見させる論理的な矛盾である。そして、そのように結合したコミュニティ言説が一般的な対象に適用される場合、そこでは特殊性の不在のため止むを得ず実践的には虚しくなるしかないのである。したがって、この場合言説が何を言おうとしても、それは実践につながらないただの言説

としてしか存在することができない。

先に述べたように、コミュニティ言説の基本前提である「コミュニティの弱体化・喪失」の問題が単に「関係」の喪失ではなく「関係」と「機能」の断絶、つまりもう「機能」を保障してくれることのない「関係」の効力喪失であるとしたら、コミュニティ言説の志向すべき内在的な論理は「機能の回復による関係の回復」または「機能の回復を保障できる関係の回復」にならなければならない。しかし、実践的な領域でこの論理を貫徹させるためには、「機能」と「関係」を互いに密着させることのできる強いコミュニティを前提としなければならないのである。その意味で、コミュニティ言説は常盤平団地のような物語と（その論理的な矛盾が自明にもかかわらず）生まれつきの親和力を持っているとも言える。結局、「機能」と「関係」の結合が一般的に前提されない近代的な状況は、コミュニティ言説をして「関係」から出発して「関係」で全てを終わらせるようにしてしまう。これが、コミュニティ言説がただの言説として残るしかない理由である。

石田（2011）は「無縁社会論」を論じながら、コミュニティ言説が社会的排除の問題を隠蔽し、問題の本質を人間関係の問題に還元させてしまうと指摘した。そしてコミュニティ言説のそのような論理展開は「自己責任論及び人間関係を万能視する議論を助長しかねない点で注意が必要である」と主張する〔石田 2011: 21〕。例えばNHKの議論をはじめ、数多くの無縁社会論は社会保障などのシステムの問題を指摘しながらも、結局には人間関係上の問題に帰結させる形をとっている〔佐々木とく子・NHKスペシャル取材班 2007; NHKスペシャル取材班

2010; NHKクローズアップ現代取材班 2010〕。しかし、これもまたコミュニティ言説としては当たり前の帰結である。「機能の回復」（または、排除の問題）を議論に引き込むためにコミュニティ言説が使える資源は「人間関係」しかないため、システムや制度などの問題に進むように見せながらも結局には人間関係の問題に戻るしかない。

もう一つ指摘しておきたいことは、このような脆弱性を有するコミュニティ言説が政策的な言説に転化する場合についてである。実践的に空虚なコミュニティ言説が政策を背負ったとしても事情が変わることではない。極端にいうと、政策や制度はコミュニティ再生のための環境提供の側面で一定程度の役割を果たすことは可能であるかもしれないが、人間関係自体を直接的に作り出すことはできないことから、所詮成敗は個人の自発性に丸投げされることになる<sup>(35)</sup>。これはそもそも「つながり」を持っていない孤立した人々の排除問題とともに<sup>(36)</sup>、石田の指摘通り、自己責任論を助長する恐れがあり、特にこの場合は政策と絡み合っている点でさらなる注意を要するのである。

## 6 終わりに

近代性の必然的な帰結としてのコミュニティ言説は、コミュニティの近代的な変化による一種の反作用のようなもので、近代社会の健全な発展のために欠かせないものであることは確かである。しかし、同様に近代性というフレームの中で存在する言説であることは、脆弱性の原因でもある。本稿は孤独死に関するコミュニティ言説において、象徴的な物語とみなされる「常盤平団地」の物語を通してコミュニティ言

説の一面に関する考察を試みる作業であった。

ある社会的な言説の是非を問うのは簡単でもないし、あまり意味のある作業でもないであろう。しかし、社会的に発話された言説は客体化し、何らかの形で社会の構成員に影響を及ぼすことから、常に省察的な姿勢を保ちながら言説の行方を注視しなければならない。本研究はそのような志向に基づいて行われたものである。

[投稿受理日2017.4.22/掲載決定日2017.7.6]

#### 注

- (1) 「孤独死」現象に関する言説の類型については呉 (2017) を参考。
- (2) 例えば、引用した記事の場合も、記事の最後の部分は孤立した人々に対する「継続的に接触するという方法を制度化する」ことを促している。
- (3) 今日、老朽化と高齢化の問題で孤軍奮闘している団地の現実、日本社会が直面している問題の一面を集約的に見せている点でも「団地の孤独死」は広く反響を及ぼすことになったと言える [呉 2017: 133]。
- (4) 例えば朝日新聞の場合、「団地の孤独死」に関する記事は1999年から2015年まで総42件報道されたが、その中で34件の記事が常盤平団地に関連するものであった [呉 2017: 133]。
- (5) 「無縁社会」という言葉は「2010年新語・流行語大賞」のトップ10に選定された。
- (6) 「絆」は2011年の「今年の漢字」に選定された。
- (7) このような状況について、小原 (2010) は「コミュニティの洪水」と表現しており、吉原 (2011) は「コミュニティ・インフレーション」と呼んでいる。
- (8) ギデンズは現代的な状況を「存在論的な安定」が崩れ、「実存的な不安」が漸増するものと捉え、その結果現れる「不確実性の回帰」のため、絶えずに「省察」しなければならない事態に人間が丸投げされていることをよく見せている [Giddens 1991; Giddens, Beck and Lash 1994]。
- (9) このような近代的な人間関係は個々人の関係への欲求によって維持されるもので、友人関係が典型的な例としてよくあげられる。
- (10) 石田が言及している土井 (2004; 2008) および森 (2000; 2008) の議論もまたこのような主観化および心理主義との関連で理解できるものである [石田 2011: 18]。
- (11) 「異邦人 (stranger)」に関する社会学的な議論としては、同名の論文を発表したジンメル [G. Simmel 1950] とシュッツ [A. Schutz 1964]、テリヤキン [E. Triyakian 1973]、レビン [D. Levine 1977] などがあげられる。
- (12) ここでの「反近代化 (counter-modernization)」および「脱近代化 (de-modernization)」といった用語はバーガー [Berger et. al. 1973] の用法に従う。
- (13) 反近代のおよび脱近代のベクトルがすべて近代性へ包摂されるという本論文の立場は、もちろん近代以降の新たな社会像を脱近代として把握する立場とは相反することである。また、ギデンズ、ベック (U. Beck) などの再帰的近代化論者たちの主張も、近代と後期近代を区別する傾向を見せている点においては本稿の立場とは一致していない。近代と脱近代 (または後期近代) をめぐる議論は非常に深く広い論争史をもつものであり、それに加えて脱近代に関わっている共同体主義の問題まで考慮すると、非常に膨大な作業を要するため、本論文の範囲を超えることだと言わざるを得ない。ただし、一つ確実に言えることは、脱近代の主張も後期近代の主張も既に近代性の中に内包されている特徴であることは否定し難い点であり、それが認められる限り本稿で取っている近代性の立場は否定できないことである。
- (14) 石田はJGSSなどのデータに基づいた分析を通して、この矛盾する心性が日本人の独特な特徴のように提示しながら、日本特有の生活保障システム (家族中心の生活保障および日本型企業経営など) およびそれとの関係で日本の個人化過程上の特徴をあげて説明している。しかし、実際にこれは日本特有の問題ではなく近代性自体に内在する問題である。
- (15) 代表的な議論としては、近代的な連帯に関するデュルケム [E. Durkheim 1984] の議論と、ギデンズ (1991; 1994)、ザイデルフェルト [A. Zijderveld 1970]、ルーマン [N. Luhmann 2007] などの近代性に関する議論、そして共同体に関する議論としてデランティ [G. Delanty 2006]、バウマン [Z. Bauman 2008] などがあげられる。
- (16) すなわち、情緒的な機能だけでなく、経済的機能、教育などの社会化機能、安全保障の機能および今

- 日の「社会保障」という範疇に該当する機能がすべてコミュニティと密着していた。
- (17) 「世帯主の年齢が低く、小家族で共稼ぎの家族もかなりあり、年齢の割に所得水準が高く一流企業や官公庁に勤めるインテリ、サラリーマン」(『経済白書』1960年度)
- (18) 入居初期、申込者(本人)の大多数を占めたのが20-30代(20代43%、30代42%)であり、当初の家賃5,500円(2DK基準)の5.5倍という収入条件を満足させる場合に限って申請することができた(ちなみに、当時大卒者の初任給は14,000円程度)[高尾 2008: 29]。
- (19) 2007年の常盤平団地の高齢化率は29.2%で、同年度松戸市の全体高齢化率17.6%を大きく上回っている。特に65歳以上の高齢者単独世帯の割合が約27.9%に達していた[高尾 2008: 29-30]。
- (20) 1996年「公営住宅法」の改定によって加速化したこのような現象のもつ危険性については森(2006)、および佐々木(2007)の指摘があげられる。
- (21) 常盤平団地での4ヶ月間の取材期間を経て放送されたドキュメンタリー番組、NHKスペシャル「ひとり団地の一室で」(2005年9月24日放送)は9.5%の高い視聴率を記録し、相当な反響を及ぼした。
- (22) 松戸市と警察が協力して公表したこのデータは、常盤平団地の要請を受けて対象を65歳以上の高齢者ではなく50歳以上に行っている点が特徴である。
- (23) 厚生労働省での事例報告は、2007年11月9日「これからの地域福祉のあり方に関する研究会」と同年12月11日「高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議」で行われた[中沢 2008b: 33]。
- (24) 2005年、松戸市は常盤平団地の「孤独死ゼロ作戦」をモデル事業に指定して年間50万円の助成金を支援する政策を策定したが、これが2007年「孤立死防止推進事業」という名の下で行われた国による1億7千万円の正式予算編成につながったと見る意見が少なくない[大山 2008: 151]。
- (25) それとともに、2008年度には辞書(『広辞苑』第六版)に「孤独死」が掲載されるようになり、特に『現代用語の基礎知識』2008年度版の「孤独死ゼロ・プロジェクト」項目には常盤平団地住民の「孤独死ゼロ作戦」を明示的に言及している[中沢 2008b: 38]。
- (26) これに関する原因としては、「孤独死」の実態把握の難しさも重要な理由の一つではあるが、「孤独死予防センター」所長のいう通りに「票につながらないから」という理由も大きいといえる[大山 2008: 155]。
- (27) 2017年4月、団地内に地域包括支援センターができ、これを第4の軸に含めて連携活動しようとする動きが現在活発に進行している最中である。
- (28) 常盤平団地の「孤独死ゼロ作戦」についての細部的な内容は中沢(2008a; 2008b; 2012)などをはじめとして様々なメディアを通じてよく知られているので、ここで具体的な記述は省略する。
- (29) 例えば、ふれあい・いきいきサロンは1994年に全国社会福祉協議会が提案して1996年から実施された事業で、2000年には「生きがい活動支援通所事業」として積極的に推進された。その結果、2001年には全国的にその数が、すでに19,647個所に達していた[黒岩 2008: 75]。
- (30) 黒岩(2009)は地域住民による支援活動の類型を「隣人型」、「互助型」、「支援型」に分けており、自治会・地区社会福祉協議会・民生委員の連携によって行われる常盤平団地の「孤独死ゼロ作戦」を「互助型」の代表的な類型として扱いながら、中沢自治会長のリーダーシップの役割についても論じている。
- (31) 自治会報全体の80%に至る記事を中沢が一人で執筆する場合も決して少なくなかった。
- (32) 建て替えの準備作業のために空き家をそのまま放置することに対して、中沢はこれが結果的に家賃の不当な値上げにつながって住民の被害をもたらすと主張し、公団を相手に「空き家損失補填」を請求(1,900万円)するなどの対応をした[大山 2008: 74-75]。
- (33) 「船橋市高根台団地」、「光が丘団地」、「草加団地」などと連携した[結城 2008: 50]。
- (34) 大山(2008)はこれに関する代表的な例として建て替えられた「都営戸山団地」を常盤平団地と対比して紹介している。
- (35) もちろん、個人を自発的に引き出す方法を探すため、多くの人たちが努力していることを否定はしないものの、ほとんどの場合、自発性を引き出すためにはそのための他の強い行為者が要求される。常盤平団地で見ることができるよう自治会に人々を引き込むためには、常にさらなる強力なメンバーの存在を必要としている。

36) これに関する指摘としては、岩田・黒岩（2004）、松橋（2012）などがあげられる。

#### 参考文献

- 石田光規, 2011, 『孤立の社会学: 無縁社会の処方箋』勁草書房.
- 岩田正美・黒岩亮子, 2004, 「高齢者の「孤立」と「介護予防」事業」『都市問題研究』56(9): 21-32.
- NHK クローズアップ現代取材班, 2010, 『助けてと言えない: いま30代に何が』文藝春秋.
- NHK スペシャル取材班, 2010, 『無縁社会: 「無縁死」三万二千人の衝撃』文藝春秋.
- 大山真人, 2008, 『団地が死んでいく』平凡社.
- 呉獨立, 2017, 「新聞記事からみる「孤独死」言説: 朝日新聞記事を中心に」『社科研論集』(29): 122-137.
- 黒岩亮子, 2008, 「高齢者の「孤立」に対応する福祉政策の変遷」『社会福祉』49: 59-77.
- , 2009, 「「孤立」支援活動と地域リーダー: 「2つ」の地域を中心」高橋勇悦・内藤辰美(編)『地域社会の新しい「共同」とリーダー』恒星社厚生閣.
- 厚生労働省, 2008, 『高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議報告書』.
- 小原隆治, 2010, 「地域と公共性」斎藤純一(編)『公共性の政治理論』ナカニシヤ出版.
- 佐々木とく子, 2007, 「孤独死の大量発生が止まらない」『中央公論』2007(11): 173.
- 佐々木とく子・NHK スペシャル取材班, 2007, 『ひとり誰にも看取らず: 激増する孤独死とその防止策』阪急コミュニケーションズ.
- 清水美恵子, 2017, 「常盤平団地自治会の地域ぐるみの取り組み: 孤独死ゼロ作戦」『住民と自治』646: 24-27.
- 高尾公矢, 2008, 「孤独死の社会学: 千葉県常盤平団地の事例をてがかりとして」『社会学論叢』(161): 19-41.
- デランティ・ジェラルド(山之内靖・伊藤茂訳), 2006, 『コミュニティ』NTT出版.
- 中沢卓実, 2008a, 『常盤平発信 孤独死ゼロ作戦: 生きかたは選べる』木の泉社.
- , 2008b, 「常盤平団地が孤独死ゼロ作戦に挑む」中沢卓実・淑徳大学孤独死研究会(編)『団地と孤独死』中央法規.

- , 2012, 「孤独死ゼロを目指し: 孤独死ゼロ研究会の挑戦」中沢卓実・結城康博(編)『孤独死を防ぐ—支援の実践と政策の動向』ミネルヴァ書房.
- バウマン・ジグムント(奥井智之訳), 2008, 『コミュニティ』筑摩書房.
- 松橋達矢, 2012, 「多様化する都市地域社会における「つながり(地縁)」の現在」『社会学論叢』(173): 9-39.
- 森千香子, 2006, 「「施設化」する公営団地」『現代思想』105.
- 結城康博, 2008, 「孤独死対策と団地自治会」中沢卓実・淑徳大学孤独死研究会(編)『団地と孤独死』中央法規.
- 吉原直樹, 2011, 『コミュニティ・スタディーズ』作品社.
- ルーマン・ニクラス(村上淳一編訳), 2007, 「インクルージョンとエクスクルージョン」『ポストヒューマンの人間論』東京大学出版会.
- Berger, Peter L. 1979. *The Heretical Imperative: Contemporary Possibilities of Religious Affirmation*. Garden City: Anchor Books.
- , Brigitte Berger and Hansfried Kellner. 1973. *The Homeless Mind: Modernization and Consciousness*. New York: Random House.
- Calinescu, Matei. 1987. *Five Faces of Modernity*. Durham: Duke University Press.
- Durkheim, Emile. 1984. *The Division of Labor in Society*, translated by W. D. Halls. New York: Free Press.
- Gehlen, Arnold. 1980. *Man in the Age of Technology*. New York: Columbia University Press.
- Giddens, Anthony. 1991. *Modernity and self-identity: self and society in the late modern age*. Stanford: Stanford University Press.
- , 1992. *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism*. UK: Polity Press.
- , Ulrich Beck and Scott Lash. 1994. *Reflexive modernization: politics, tradition and aesthetics in the modern social order*. Stanford: Stanford University Press.
- Lasch, Christopher. 1980. *The Culture of Narcissism*. London: Abacus.
- Levine, Donald. 1977. "Simmel at a Distance: On the History and Systematics of the Sociology of the Strangers", *Sociological Focus* 10(1): 15-29.

- Schutz, Alfred. 1964. *Collected Papers Vol. II: Studies in Social Theory*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Simmel, Georg. 1978. *The Philosophy of Money*. Translated by Tom Bottomore & David Frisby London: Routledge & Kegan Paul.
- , 1950. "The Metropolis and Mental Life" in translated by Kurt Wolff (ed). *The Sociological of Georg Simmel*, New York: Free Press.
- Triyakian, Edward. 1973. "Perspective on the Stranger" in Sallie Teselle (ed). *The Rediscovery of Ethnicity*. New York: Harper and Row.
- Zijderveld, Anton. 1970. *The Abstract Society: A Cultural Analysis of Our Time*. Harmondsworth: Penguin Books.